

コザの都市形成と歓楽街 ——1950年代における小中心地の簇生と変容——

加藤 政洋*

I はじめに

(1) 基地都市の景観表象

太平洋戦争末期の地上戦を経て、戦後、米軍はニミッツ布告を適用して南西諸島の住民を日本の行政から切り離し、独自の支配体制を築く。米軍占領（統治）下という特異な状況のもと、沖縄島では大規模な土地の接収ならびに軍事基地の建設が進められると同時に、部分的かつ段階的に開放された土地を開発して、急速に都市化が進んだのだった。

ところによっては、自然発生的に市街地が形成された一方、地権者が組合をつくって区画整理を行ない、新しいまちづくりを推進した例もあるほか、米軍の監視・指導下で民政府ないし各自治体が都市計画を実施し、計画的に市街地を建設することもあった。

別稿で論じたように、市街地形成の地理歴史的なコンテキストにおいて突端をなしたのは、歓楽街の成立である。すなわち、売春を前提とする料理屋街が都市（基地）近郊の土地区画に計画的に建設されたほか、那覇・真和志の各所や、浦添・宜野湾・北谷・嘉手納・越來・具志川など、基地周辺の都市化地域において、大小の歓楽街が相次いで誕生した¹⁾。

1969年、沖縄を訪れた民俗学者の宮本常一は、「基地付近の町」と題して、基地都市の特徴を次のようにまとめている。

* 立命館大学文学部准教授

…〔略〕…基地の町は性格的にゆがめられてしまうものである。もともと軍人は生産者ではない。その生活の中には日常的精神というようなものは少なく、軍隊内のきびしさに対して、隊外の生活では若干の放埒がゆるされる。米軍の基地の町は酒と女がつきものとなる。〔『私の日本地図 8 沖縄』、118-119 頁〕

広大な土地を排他的に占有して建設された軍事基地は、従前の土地利用を不可能にすると同時に、周辺部におけるなかば不可抗力的な都市化を引き起こす。しかも、その都市化は「酒と女」に示されるごとく、主として米兵向けのサービス業に特化した業態の集積を生み出し、消費都市とも歓楽都市とも称されるような、空間と景観を生産するのだ。

沖縄島にあって、こうした基地都市を代表するのが、嘉手納空軍基地のゲート前に形成された旧越來村（現・沖縄市）のコザであろう。宮本は、与勝半島にも米軍基地（ホワイトビーチ）の影響で「田舎道にそって飲屋やホテルが点々とある」さまを観察したあと、コザにも立ち寄り、その時の印象を次のように書きとめている（119-120 頁）。

勝連からのかえりにコザの町も通って見た。米軍が嘉手納に広大な飛行場をつくったことにともなって、台地の上に忽然として生れ出た完全な消費都市である。工業らしい工業は何一つない。店屋という店屋のほとんどが英語の看板をあげている。

通りすがりの民俗学者は、コザを「異質の町」として位置づけることしかできなかったものの（120 頁）、基地都市に固有の消費空間の編成は、都市化最初期にはじまっていたのであり、1960 年代末に彼が目にした景観は、1950 年代初頭の段階ですでにしてその素地が確立されていたことを、例えば次のような叙景から知ることができる。

西部劇の一カットを思わせる軒並みと横文字の看板——原色ずりのパンパン——むせかえるバーやカフェー〔、〕きまつて寝台のある特別ルーム、案内役を買つて出たタクシーのラツシユアワー、軍作業員の色とりどり—那覇より便利なバスの流れ—基地の子達——キツスの却し、小売——ハーニー族とその特別仕立の荘、白と黒と黄と、それ以外に緑や—青も実在しそうな混血の結晶——等々。（『琉球新報』1953年10月23日）

1950年代初頭、「コザには特殊な雰囲気と生活がある」ことを認めつつ、「雑多な色合いで織りなされた街頭」をこのように描写してみせたのは、青山洋二という人物であった（詳細は後述）。青山は、この素描が「一断面にすぎない」と断りを入れつつも、それが「実質上、コザの一要素」であり、誰もが「こうした心象スケッチを試みるであろう」と結論づける。

本稿は、基地都市の典型というべきコザを対象として、都市化初期（1950年代）の空間形成の様態を、簇生する小中心地とその変容に着目して明らかにするものである。1950年代初頭のコザ（越来村）は、土地の収用にともない田の面積が戦前の約6分の1、同じく畑は約7分の1に減じていた一方、人口は約2倍の16,674人にふくれあがっていた。可働人口の就業状況を見ると、軍作業1,941人、農業1,602人、家事3,212人、工業215人、商業439人、土木建築248人、官公吏595人で（計8,252人）、軍作業はじつに23.5%を占めている（『沖縄タイムス』1951年3月15日）。このような人口構成と土地条件、そして基地の建設を背景に都市化が進んでゆく。

それから10年後の就業状況を見ると（表1）、サービス業の割合（24.3%）は軍作業のそれ（16.2%）をはるかに上回っていた。つまり、都市化初期の10年間でサービス関連業務は著しく発展し、そのような就業構造の特性が景観へと如実に投影されてゆくのである。

表 1 産業別就業人口

業種	人口	割合 (%)
農業	1,613	9.3
建設業	162	0.9
製造加工業	681	3.9
卸小売業	2,660	15.4
金融保険業	364	2.1
運輸通信業	288	1.7
公益業	34	0.2
サービス業	4,208	24.3
軍作業	2,796	16.1
公務員	830	4.8
会社員	646	3.7
民労務	3,039	17.5
計	17,321	100.0

出典：『コザ市のすがた』（1961年）

(2) 都市形成の出発点「コザ」

まず、本格的な都市形成がはじまるまでの前史（1940年代後半）について、コザ市編『コザ市史』などを参照しながら概観しておくことにしたい。1945年4月2日、越来村の嘉間良に避難民の収容所が設置される。米軍が沖縄島に上陸した、その翌日のことだ。「コザ」史の端緒が開かれたのは、まさにこの時である。同年9月には人口が2万人を超えて、その名も「胡差市」として市制が敷かれるところとなった。

ところが、元居住地への帰還が認められて人口が減少すると、12月9日には市制が廃されて越来村にもどる。再び「胡差」が行政上の名称として復活するのは、1956年6月13日、翌月の市制施行を控えて「コザ村」へと変更された時であり、そしてむかえた7月1日、カタカナの「コザ市」が誕生したのだった。「コザ」という名称の由来については諸説あるものの、ここで

は戦後新たに誕生したこの地名が指し示す空間と、その位置についてのみ注目しておきたい。

終戦直後の統治策によって、収容所の設置された嘉間良が、越来村における最初の中心地となった。1946年6月、嘉間良の十字路に移設された村役場を中心に「越来村の中心部が形成され」、事後的にみればわずか数年間のことながらも、中心地たる嘉間良は「都市的繁栄」の途をたどってゆく（前掲『コザ市史』、477頁）。当時、増え続ける避難民を収容すべく、「字嘉間良を中心に越来、室川、安慶田の三部落が主な収容所にあてられ、米軍は、この地域を『キャンプ・コザ』と称していた」（西田文光伝刊行委員会『西田文光伝』、92頁）。

図1は、1948年に米軍が作成した地形図（1/4800）から、嘉間良付近を切り出したものである。図のほぼ中央に位置しているのが「嘉間良十字路」で、周囲には建物が密集している。また、十字路の北西に「KOZA」の文字を確認することができる。図幅名は「KOZA」で、「KOZA」集落のほか、周辺に



図1 嘉間良十字路付近（米軍作成 1/4800 地形図 [1948年] に加筆）

は(切り出した図の範囲外も含めて)「GOEKU」(越来)、「MUROKAWA」(室川)、「AGEDA」(安慶田)の地名も見られるが、「KAMARA」(嘉間良)の表記は見当たらない。このことから、米軍側は「嘉間良 = KOZA」と認識していたとみて間違いあるまい。

ちなみに、前述の青山洋二は、本土から引き揚げてCIC(米軍防諜部隊)に勤務していた1947年ごろのこととして、「事務所で見つけた地図にはすでに『KOZA』の文字があった」(『追憶』、35頁)と回想している。青山が目にしたのは、この地形図か、あるいはその原図だったのかもしれない。

以上のように、コザの歴史は嘉間良にはじまるものの、その後、接収されていた土地が段階的かつ空間的にはランダムに開放されるのにあわせて、地域の随所に小中心地が簇生してゆく。このことは、とりもなおさず嘉間良の中心性が低下してゆくことを意味していた。

別稿で述べたように、都市計画にもとづく土地開発として最初に着手されたのは、1950年の《八重島》ならびに「ビジネスセンター」の建設である(加藤政洋「ビジネスセンター構想と《八重島》」)。この地区開発を皮切りに、嘉間良の脱中心化と、軍道の結節点を核とする都市化が同時に進行してゆくのだ。事実、「都市化へ拍車」と題された『沖繩タイムス』(1951年3月15日)の記事では、「去年の秋あたりからこの春へかけての、都市化の進展ぶりには眼をみはるものがある」と指摘されている。

以下、1950年代の(広義の)コザにおける都市形成を、小中心地の簇生と変容という観点から記述してゆくことにしたい。

Ⅱ 歓楽街の分布

本章では、コザの都市形成期(1950年代前半)に簇生した中心地の分布と各々の特徴を概観する。ここで参照するのは、1953年10月後半に『琉球新報』紙上で7回にわたって連載された、青山洋二著「コザ今昔物語 外国のよ

うに華やかで」である。

1921年、現在の沖縄市山内に生まれた青山は、戦後、1947年に米軍のCIC（防諜部隊）に就職した後、商店の経営を経て、1954年に琉球新報社の記者となっている（青山洋二『追憶』²⁾）。すると、「コザ今昔物語」は、入社直前の連載ということになるだろうか。また、その後は『オキナワグラフ』の編集部長や沖縄市文化協会長を務めるかたわら、多くの随筆や書物を著わすなど、戦後沖縄の文化誌を語る上で欠くことのできない人物のひとりである。

この連載のなかで（当時まだ30代前半の）青山は、越來村における「都市形態の蝟集状況」、すなわち中心性を確立した場とその補完区域として、三つの地域を特定した。すなわち、1)「コザ十字路を中心とした地域（越來、西森、安ヶ〔慶〕田、照屋、コザ、室川各区）」、2)「ビジネスセンターを中心とする地域（センター、八重島区、胡屋区の一部）」、そして3)「諸見大通りを中心とする地域（山内、山里、諸見里、園田、胡屋各区）」である。

以下、この区分にしたがって、中心性の強度を高めた場所を概観しておこう（図2）。なお、2)に関しては、開発の経緯を踏まえて、二つの節に分けて論じる。

(1) コザ十字路とその周辺

現在の国道330号線と国道329号線の交差点が、コザ十字路である。前者は当時、軍道24号線で、村域を貫通する幹線道路であった。連載時、この十字路は地元で「照屋十字路」とも呼ばれていたようだ。青山はコザ十字路が美里村と越來村との境界に位置することを理由に、「多分に租界地的な雰囲気」があるとし、商店も営業上——すなわち客層——は東と西とに区別されるような、「特殊な空気」に包まれた「国際街」だと位置づけている。

ここで注意しなければならないことは、青山の方向感覚である。彼は「十字路」に続いて、「美越通り」を説明するのだが、その冒頭で「十字路から



図2 対象地域の概観 (1/20000 空中写真 国土地理院 1984年10月31日撮影に加筆)

- ①山里三叉路 ②諸見百軒通り ③パラダイス通り ④中の町
⑤胡屋十字路 ⑥センター通り ⑦八重島 ⑧嘉間良 ⑨コザ十字路

西へ、嘉手納方面に向つていくと、美越通りがある」と述べた。美越通りは、やや西に傾きながらも、どちらかと言えば北に延びる街路である。すると、コザ十字路を中心とした東西区分は、実のところは軍道24号線を挟んだ南北というほうが正しい。「特殊な空気」が意味するところについては次章でふれることとするが、コザ十字路とそれを「延長したような」美越通りとは、「あくどい女性群のほうこう〔彷徨〕する国際通り」であったという。

美越通りに続いて、安慶田通り（コザ大通り）についても簡単にふれたあと、青山は「コザ発祥の地」と位置づける「蒲原（カマーラ）」（嘉間良）を取り上げる。前述のとおり、米軍の上陸後、難民収容キャンプが設けられたことで、越来村の「中心地帯」となった場所だ。

沖縄風土記刊行会編『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』（41頁）によると、当時、「越来村の中心地といえ、この村役所（嘉間良）の附近」であり、役場のほかに、労務事務所、警察署、裁判所、検察庁、琉球銀行支店な

ど、高次の中心機能が集積して、まさに「中央官公庁街の概観」を呈していた³⁾。一帯には「私設の電灯」も設置されて、後に村長となる大工廻朝盛が経営していたという。

また、桑江朝幸、豊平朝義、照屋幸繁、比嘉良実らの共同経営にかかる露天の「中央劇場」が建てられたほか（1947年）、不用品の委託販売（物々交換）所である「コザデパート」も設立された（1948年）。後者は、桑江朝幸（後の沖縄市長）ならびに「コザ今昔物語」の執筆者である青山洋二の共同経営で、「コンセットの鉄骨にテントを張っただけ」の簡易な店舗であった。看板には「村民の不用品を売って差し上げます。手数料として10%いただきます」と掲げていたという⁴⁾。起業当初は自由企業が認められていなかったものの、1948年10月24日に商業・配給に関わる官営制度が廃止されたことを受けて、自由企業制度下の店舗として、「コザデパート」は再出発をとげる（前掲『西田文光伝』、95頁）。これが、「米軍占領下における初めての店舗」であった（前掲『追憶』、22-25頁）。

「コザデパート」は「中央劇場」の入り口に立地したことから、「その周辺には市場形態の店が次々と出て」くるところとなる（前掲『西田文光伝』、94頁）。そして、本格的な都市化に先行して、嘉間良の商業中心的性格を決定づけたのが、1950年4月の「胡差（コザ）中央市場」の開設である。設立に尽力したのは、越來村・コザ市・沖縄県の各議会議員を歴任した西田文光（1913-1983）であった。興味ぶかいことに彼は、戦前、大阪の港区で目の当たりにした私設市場の隆盛を参考に、市場の設置を着想したのだという。

このようにコザ発祥の地であり、戦後越來村における初期中心であった嘉間良も、「現在コザらしい雰囲気はもうこゝにはない」（『琉球新報』1953年10月25日）と青山が指摘するごとく、コザの名称はコザ十字路に奪われ、住人もコザ十字路やビジネスセンター方面に移動し、中心性はわずか数年で雲散霧消したのだった⁵⁾。

(2) ビジネスセンターとその周辺

「開放地第一号？」という「コザ今昔物語」の見出しに示されるごとく、ビジネスセンターは越来村にあって最初の計画的な開発地区であった。開発の経緯については別稿で詳述したので、ここではそのあらましかを述べておくことにしたい。ビジネスセンターは、越来村で最初の公選村長となった城間盛善が1949年に構想した地区計画にもとづく開発である。同年10月1日に軍政長官に就任したシーツ少将の後押しを受けて、1950年のなかばから開放された土地の開発に着手し、一大商業地区が誕生したのだった。

「村一番の繁華街」となったビジネスセンターについて、青山は「それにしても開放地は大きな収穫であつたし、その後村当局指導の街として、その名の如く整然たる美観を呈する計画街としての中央街となつた」と述べ、その計画性を高く評価した(『琉球新報』1953年10月26日)。

このセンター大通りから徒歩で15分、「こんなところにいつの間にできあがつたのだろう」と思わせるような高台に、ビジネスセンターにさきがけて開発されたのが、売春街としての《八重島》である。この街の成り立ちについても前述の別稿で論じているので、ここでは青山の感想を紹介するにとどめておきたい。彼は、センター大通りを「通称『裏町』ニューコザへの玄関」に当たると位置づけ、空間的な接続性を強調している。だが実際には、徒歩で15分も離れた場所に立地し、客の多くはセンター通り経由でタクシーを利用していった。そうした位置関係を踏まえて、青山は「……こゝの前途について私は多くを知らない。即ち、センター街と一連の町となるかそれとも現在のまま孤立する町としてつづいていくか——あるいはその孤立状態は維持されるのか——閑古鳥は鳴きはせぬか」と案じてみせた。

結論を言えば、こののち《八重島》は衰退の一途をたどる。1954年6月のオフリミツ(米兵の立ち入り禁止措置)によって倒産や転出が相次ぎ、最盛期に百軒を超えた料亭は1958年の段階で60軒にまで減少していた。その後も、後発の歓楽街である辺野古や金武へと移転する業者が現われ、1963年

7月には25軒に、さらに同年8月のAサイン基準引き上げによって15軒へと減じた（『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』、115頁）。

(3) 胡屋十字路とその周辺

戦前の越来村域で、規模は小さいながらも商店が集積して「宿場町の観を呈していた」のが、胡屋十字路（グヤカジマヤー）である。戦後は嘉手納基地の玄関口として、また軍道24号線との交点となったことから、中心性を著しく高めていく。この点について青山は、「……戦前から交通の要路として名をなしたグヤカジマヤーは今昔ともに要路に変わりなく〔、〕中部地区の中央部を占めた越来村、その中心胡屋十字路は今や嘉手納航空隊の玄関でもあり、コザ十字路とともに越来村の二大十字路であり、全島の十字路の横網格といえよう」と述べた上で、「越来村の中心は胡屋十字路であるといえば言を左右する者もないだろうし、都市構成への中心提示もどうやらこの十字路になりそうだ」、と結論づけた。

このような位置づけの背景として、1952年から翌年にかけて、相次いで周辺地区の土地が開放されていたことを挙げておきたい。それは後に「中の町」となる区画整理事業や十字路北側の市場・商店街の建設へと至り、明確な都市計画があったわけではないにせよ、胡屋十字路を中心とした都市建設が本格化してゆくのである。

(4) 諸見大通りとその周辺

コザ十字路や胡屋十字路付近の取り上げ方とは異なり、青山は幹線道路である「諸見大通り」を挙げている（『琉球新報』1953年10月28日）。しかしながら、議論の焦点は前二者と同様、道路交通の結節点である「島袋三叉路」に置かれていた。青山によると、ここは戦前・戦後を通じて「島袋」とは何の関係もなく、考えられるのは、この交差点の東方、隣接する北中城村の字である「島袋」が流用された、というものである。そして彼は、「この地点

から一部落越した彼方」にある「『鳥袋』の名を冠せられたというのはどう考えても不合理」であって、そもそも「この三叉路は越来村山里区にあるのだから『山里三叉路』」にすべきであると主張するのだった。経緯はさだかでないものの、現在、この三叉路は「山里」と呼ばれている。

諸見大通り一帯は、1940年代末の軍道5号線拡張工事にともなう立ち退き問題で工事が延滞し、連載時は寂れ模様であったものの、工事の完成後は商店が軒を連ねて、コザ十字路やビジネスセンターにもひけをとらない発展ぶりを示していた。『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』では、1948年末頃のこととして、あるタクシー会社の運転手たちが「鳥袋三叉路附近に間借りをするようになり、同三叉路は軍作業員の通勤のときの溜り場でもあったので、しぜん、小規模の食べ物屋、雑貨屋、写真館が軒を並べるようになった」（43頁）としている。

興味が持たれるのは、連載の最終回で、諸見大通りから分岐した「横丁や繁華地帯」が列挙されていることだ（『琉球新報』1953年10月29日）。すなわち、新生通り（パラダイス通り）、桜町通り（旧5号道路の部分）、ハーニー部落⁶⁾、下り坂通り、ライカム通り、園田通り（旧5号道路）である。

付近の「繁華地帯」の代表例は、「諸見百軒通り」であろう。おそらく、ここが「旧5号道路の部分」にあたるという「桜町通り」ではあるまいか。『中部商工名鑑1962年』には、「これまで諸見旧通りで親しまれていたバー街が名実共に姿を改め“諸見百軒通り”で出発するなど目覚ましい発展の一途をたどっている」（14頁）とあるので、1960年前後に改称されて、通り会が組織されたものと思われる。

この旧道にサーヴィス業が集積する端緒を開いたのは、「佐八重」という料亭の開業であった。「通りに面して二階建のかなり大規模な料亭を建て、これが大当たりしたので、次第に他の業者も道路に面して店をかまえるようになり、やがて24号線道路ができると、急速に同通りがにぎわいをみせた」のだという（『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』、47頁）。1970年代後半、100

軒には及ばずながらも 60 軒以上の店舗が通り会に加盟し、裏街・沿道型の社交街へと成長していた。

青山が例示した「新生通り（パラダイス通り）」は、『沖縄風土記全集 第三卷 コザ市編』において、「旧諸見通りから入るパラダイス通り」（46-47 頁）として言及されている。それによると、この横丁は「歓楽街通りとして計画され、道路突き当りに映画館（中部沖映）」が配置された。軍道 24 号線（現・国道 330 号線）東の園田側は、基本的にスプロールした地区で、明確な区画整理はなされていない。ところが、パラダイス通りは袋小路のような形態ながらも、表通りと直交する街路として直線的に開発されている。街区の形状は、たしかに開発の計画性を物語るものだ。実のところ、このパラダイス通りの開発には、青山自身が関わりを持っていた。

青山は 1950 年、桑江朝幸と共同経営していた「コザデパート」を離れて、諸見大通りに「青洋堂」という土産物屋を開店する。さらに、諸見里の地所を大山朝常（後の沖縄市長）らとともに借り受け、次のようにシンプルな街区開発を行っていた。

幅員三間（約 5.5 メートル）の道路を一本通し、間口が三間半（約 6.3 メートル）のマスをつくった。二十軒分の店舗用地ができ上がり、一マス五千円（B 円）、地代は坪当たり十円で希望者に提供した。

この開発にあたっては、越来村長であった大工廻朝盛の全面的な支援を受け、米軍から重機や電柱を調達して、すべて無料で提供されたのだという。『コザ市史』（489 頁）によると、大工廻が村長に就任した二日後の 1950 年 9 月 5 日、軍道 5 号線の拡張工事にとまなう 68 軒分の民家立ち退きの代償として、諸見里原の 4 千坪が開放された。おそらく、青山たちはこの開放されたばかりの土地に目をつけ、村長の後援を得て、新生通り（パラダイス通り）を開発したものと思われる。

「パラダイス通り（新生通り）」と命名された通りには人があふれるようになり、「基地を抱える市町村から、短期間にでき上がった街を参考にしようと視察者が絶えなかった」（前掲『追憶』、26-29頁）。青山自身も、このパラダイス通りで「彗星」という喫茶店を開業し、米兵にビールが飛ぶように売れたことを回想している。

なお、『沖縄タイムス』（1952年1月1日）の新年広告には、「コザ新生通り」も掲載されており（表2）、一覧化された店舗の数をかぞえると、青山のいうごとく20件分であった。そのなかには、彼自身の経営する「彗星」の

表2 「コザ新生通り」の新年広告

店舗	経営者
映画常設 コザパラダイス	比嘉善夫ほか2名
稲嶺理髪館	稲嶺盛英
大島毎日新聞沖縄市局	与崎 太
大山商店	大山朝孝
食堂チエリー	
新生亭	高江洲義真
喜友名商店	喜友名朝清
高宮商店	高宮城 清
月美食堂	奥間政佐
飲食店 梯梧	
□平名洋裁店	□平名知正
飲食店	嘉陽ミツ
飲食店	喜納ヨシ
高宮城商店	高宮城実盛
レストラン□の屋	花城可徳
食堂	高宮城實敏
喫茶店 彗星	青山洋一
食堂 そよかぜ	勝田与治
新崎商店	新崎盛喜
中央美粧院	比嘉政子

名もあることは言うまでもない。

(5) 連担する繁華街

青山洋二が「コザ今昔物語」を1953年10月に連載した当時、1)「コザ十字路を中心とした地域」、2)「ビジネスセンターを中心とする地域」、そして3)「諸見大通りを中心とする地域」は、「それぞれ人口のブロックを形成しているが〔、〕今のところ、地形や軍施設の関係から三地域の境界がはつきりした形になつて」いた、つまり空間的には明確に分離していた。

『中部商工名鑑1962年』における「コザ市の展望」では、「商工都市コザ市は基地を背景にいまなお三つのブロックに分けられ」(14-15頁)るとし、諸見、ゴヤ十字路、コザ十字路の各ブロックが簡潔に紹介された。一見すると、青山の説明した空間分化の枠組みが維持されているように思われるが、各々の中心性はその強度を明らかに高めている。

「コザ市の表玄関」と位置づけられる諸見ブロックには、「スーベニア、バー、レストランなどが二十四号線をはさんでひしめき合い」、当時、コザ最大のキャバレーもオープンしていたという。くわえて、諸見中央・島袋という二つの市場や、映画館(島袋琉映)も立地していた。以前、筆者が戦後沖縄における都市形成過程の初期に見いだした「市場・劇場(映画館)・歓楽街」の三点セットが、ここにも現出していたことになる(加藤政洋『那覇戦後の都市復興と歓楽街』)。

では、青山が「都市構成への中心提示もどうやらこの十字路になりそうだ」と予想していた胡屋十字路は、どのようになっただろうか。

コザ市の心臓部はゴヤ十字路一帯である。別名ビジネス・センターともいわれ、市役所をはじめ警察署、コザ病院、金融関係、商店の支店、支社、娯楽施設、バー、キャバレー飲食店、質屋、レストラン、喫茶店とあらゆる業者がひしめいている。アチラさん相手の業者が殆どで盛り場

は夜ともなれば一大不夜城となる。

このように胡屋十字路一帯は、越来村最初の都市計画にもとづいて成立したビジネスセンター区域と連担して、よりいっそうの歓楽色を帯びながら、青山の予想したごとく、明確な都市中心へと成長していた。

他方、コザ十字路は「黒人街として結構繁昌している」ことが大きな特色であるとされ（この点については後述する）、「料亭あり、映画館あり、銀行あり、遊技場あり、バー、キャバレーありで〔、〕街は土曜、日曜、ペーデーともなれば黒人達で賑わう」と紹介されている。そこに、この十字路の「もう一つの特徴」である「十字路市場」があいまって、「一部の黒人街を除けば庶民の街としてコザ市の重要商業地域となって」いたのである。

『沖繩風土記全集 第三巻 コザ市編』（75頁）によると、1950年頃から「旧字跡や東町を中心に外人相手の飲食店などが建ち、十三号線沿いに移住者がふえはじめた」といい、さらに1951年になると「十字路市場が創設され、翌年には池原幸長氏を中心にして、本町通りの中通りの都計が行なわれた」とある。実際、『コザ照屋1965』によると、1952年5月に「地主の池原幸長氏が主体になつて地主が協働して越来村当局の指導の下に都計がなされ、当地域の基礎を築いた」⁷⁾、また1953年7月に「十字路オリオン劇場と第一セントラル琉映館が開館され、当地域の発展が約束された」とある。やはり、ここでも市場・劇場・歓楽街の組み合わせが商業中心を構成していたわけだ。

以上のように、1950年代コザの都市形成は、三つの商業中心とその発展をもって特徴づけられるだろう。けれども青山は、「境界」が明確であるとする指摘につづけて、以下のように付言することも忘れなかった（『琉球新報』1953年10月24日）。

しかし、最近に至つて三地域が連結されつつある。即ち、村を縦貫する五号・二四号道路に沿つて、空地という空地はくまなく家が建ちつつ

あるからである。

今後、右の道路を幹線として家並が東西へ延びてさらにその膨張によって三地区を一つにく、つた暁「コザ市」の実現が考えられる。

市制の施行は1956年7月1日まで待たねばならないものの、山里（島袋三叉路）で軍道5号線と合流した24号線が村域を縦貫して三つのブロックを「連結」し、空地には次から次へと建物が充填されて、商業地が連担しはじめていたのである。実際、『中部商工名鑑1962年』に掲載された「コザ市全図」は（図3）、24号線に沿って「商工業地域」が連担しつつ、大まかには既述の三ブロックに「繁華街」が形成されている様子を見て取ることができる。

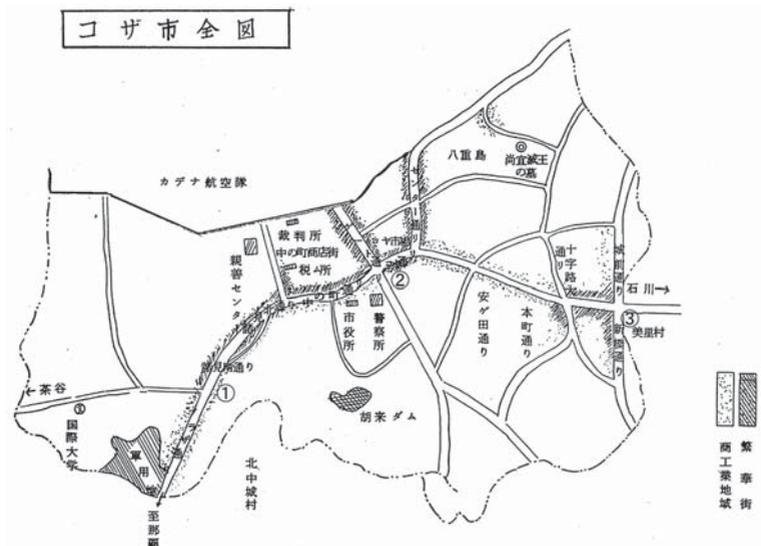


図3 連担する商業地区（『中部商工名鑑1962年』所収のコザ市全図に加筆）
①山里三叉路 ②胡屋十字路 ③コザ十字路

Ⅲ 変動する中心地

前章で確認されたように、1950年代コザにおける市街地形成は、計画開発か自然発生かを問わず、複数の中心地が簇生し、それらのなかから三つの場所が中心性を高めて、都市空間を構成していた。ここで注意しておきたいのは、いくらかのタイムラグをはらみながら複数の中心地が芽を出し、時間の経過とともに移動と変容をとげつつ、基地都市の空間が生産されていったということだ。

本章では、中心地の開発の計画性、移動、そして変容に着目することで、あらためて基地都市における「空間の生産」過程を整序してみたい。

(1) 嘉間良の中心地化／脱中心地化

すでにみたとおり、「難民収容地区として、キャンプ的な住民の『臨時集落』が成立形成された」こと、それが嘉間良の出発点である。そして、「高台地に野戦病院などを置き、眼下の低地に難民を収容して監視につとめるというためでもあったろうが、意外な位置に臨時集落が成立し、戦後新生のコザ市の発祥地になろうとはかつて考えても見なかった」というのが、当時を知る者たちの実感であった。結果として、戦後越来村の中心は「嘉間良に移った」ばかりか、米軍の統制下にあつて特異な都市的生活様式を根付かせるところとなったのである（前掲『西田文光伝』、95-97頁）。

しかしながら、青山洋二が「コザ今昔物語」を連載した当時（1953年10月）の嘉間良は、「現在コザらしい雰囲気はもうこゝにはない」状態であった。それは、「コザ」の名称が、嘉間良北側の高台に開発された《八重島》に「ニューコザ」として、さらには「宮里／照屋十字路」に取って代わる「コザ十字路」として定着していたことにくわえ、村役場や琉球銀行の支店など、主だった中心機能が開発の進む胡屋へと転出した結果でもあったのである。中心地は移動したのだ。

興味ぶかいことに、「コザ今昔物語」が連載される直前の1953年6月、嘉間良が全島の注目をあびる。その背景を整理するならば、以下のようになる。すなわち、同年3月末日、米軍は夜間のオフリミッツを全島に発動した。この時は夜間に限定されていたとはいえ、主として軍人・軍属の余暇時間にサーヴィスを供給する歓楽街への影響は、はかりしれなかったことだろう。米軍側も基地に依存した経済のありようについては理解しており、「オフリミッツで善良なドル獲得を目的とした諸営業者に経済的な迷惑をかけていることは軍もよくわかっている」として、オフリミッツ解除に向けた行動を5月なかばから起こしていく。具体的には、参謀次長ならびに軍医部長がそろって中部地区の衛生状態を視察し、「米兵は憲兵が、沖縄女性は警察が取り締まることになっているものの、完全な取り締まりは困難である」ことを認めた上で、「琉球全住民の協力」を要望した。

その方策として示されたのは、各町村で従来の歓楽街のほかに「特殊地域」（新聞報道では「赤線地域」とも称された）を新設し、米軍側は軍人・軍属の「オフリミッツ」の立て札を出して立ち入りを認めない、そして市町村側は、警察と協力して、売春行為を取り締まる、とするものであった。嘉手納を除く中部地域では、この二つの条件に関する協定が結ばれ、軍衛生部長・憲兵副隊長らの検査を受けた上で、6月4日から一斉にオフリミッツが解除される。

すなわち、「去る四月一日以来実施されて来たオフ・リミッツは、関係市町村の手で『赤線地帯』を設けることによって、初めて禁を解かれることになり、那覇、真和志、嘉手納の一市二村を除くほかは、四日から一斉にオン・リミッツとする旨〔が〕正式に軍から公表され、二カ月ぶりにやっと解決を見ることになった」（『沖縄タイムス』1953年6月2日）。オフリミッツの解除をめぐって、はっきりとした地域的な差異があらわれたのだ。

解除の対象に含まれた越来村において、「特殊地域」はいったいどこに設定されたのだろうか。

赤線地帯かま原区 胡屋と胡差十字路の中間あたりから東の方へ入ったところ、ここは純農民と馬車輓きの住む小さな部落だ。然も赤線地帯となったところは、部落よりも畠地帯の方がはるかに大きい。どうみても、今までは売春行為等といったものとは殆ど無関係だつたとしか思われなところだ。その設定について同村助役は部落の納得を得てから軍係官立会いの上で決めた。(『沖縄タイムス』1953年6月3日)

「かま原区」とは、嘉間良(釜原)区のことにはかならない。有名無実の「赤線地帯」設定は、すでに中心性をなくした嘉間良の状況を暗に物語る事件であったと言えるのかもしれない。

(2) ビジネスセンターと《八重島》

1950年4月、ビジネスセンター用の土地が開放されると同時に、越来村では「都市計画委員会を組織し此の地域を三つに区分し南は商店街とし中間は都市近郊農業の研究地帯とし北方は米軍人軍属の娯楽地帯にすると云う構想のもとに建設」を進めていく(総務課『越来村村勢要覧』、38頁)。つまり、商店街としてのビジネスセンターと娯楽地帯(=売春街)としての《八重島》は、「都市計画」という枠組みのなかで一体的に位置づけられて開発されていたことになる。

立役者となった当時の村長である城間盛善は、この二つの街を次のように回顧していた。

そのうちに越来部落の外部にある新解放地の中の八重島原に風俗営業の家が建ち始めた。これは故稲嶺盛松氏を中心とした業者が、越来部落の地主と契約して建築したもので、またたく間に大きな風俗営業の集団となった。こうして外観上まるで二つのセンターが出来たように見え、

八重島原の方が先に出来上がったが、「裏町」と呼ばれるようになった。この俗名が示すように、主体はあくまでも表の方のセンター大通り一帯の地域であって、徐々にではあるが着実に町作りが進みつつあった。（「コザ BC 通りの変遷」）

空間の総体的領有状態から、部分的に開放された土地を基盤に都市が形成される過程において、占領者との社会政治的な折衝を通じ、〈表〉と〈裏〉、あるいは〈光〉と〈影〉の空間が生産されたのである。両者は表裏一体、まさにコインの両面というべき双生の空間であった。そして、〈表〉と〈裏〉をなす「二つのセンター」の開発が、「都市計画」の骨格をなしたということ自体のうちに、基地周辺地域に固有の「空間の生産」の論理をはっきりと読み取ることができる。だがここでは、「センター」が中心の地位にとどまることができなかつた事態に注目しておかなくてはなるまい。

《八重島》については前章で略記したように、その他の中心地の興隆にあわせて衰退を余儀なくされた。「ビジネスセンター」にしても、「米琉親善」を旨とする理想通りの商店街に成長したわけではなかった。この点について、『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』では、「……この通りは商店街として構想されたものだが、八重島の特飲街からはみ出したかたちでバー、質屋などが進出し、いまでは、むしろバー街といった感じである」（116頁）と指摘されている。けれども、両者の位置関係を考えるならば（図4）、たんなる「張り出し」効果として捉えるわけにはゆくまい。《八重島》側は歓楽（売春）街としての中心性を弱めつつ、その「裏町」性をビジネスセンターが引き入れることで、両者ともに空間的な変質をとげてゆくのだ。

事実、ビジネスセンターの開発区内である「センター4、5、6、7、8、19班（コザ病院、コザ保健所附近）は、周辺に借家住いをしている特殊婦人の売春がたたって、永久オフリミッツといわれ、業者は策もつきはてた状態〔1958年頃〕」（『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』、52頁）であったという⁸⁾。

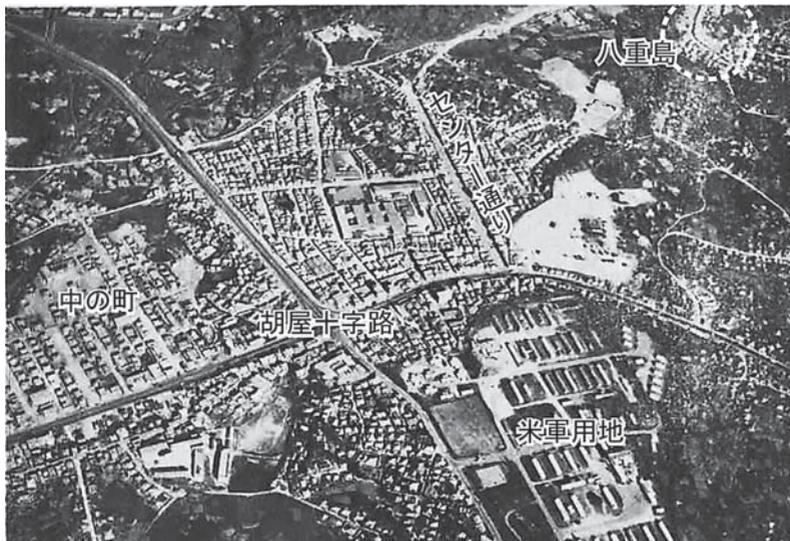


図4 センター通りと八重島の位置関係
 (『コザ 1958年コザ市昇格二周年記念誌』の表紙写真をベースに筆者作成)

(3) コザ十字路の変容

都市化初期のコザ十字路を知る上で、青山洋二の連載に先立つ「戦後派地帯を衝く」と題された『琉球新報』(1951年6月11日)の記事が参考になる。「触手ある小店街 ^{かじまやあ}メリケン道路 宮里十字路」と見出しの付けられたこの記事では、「越来美里両村が接する堺、俗称宮里カジマヤー^あー帯」の殷賑ぶりが以下のように伝えられた。すなわち、十字路からコザ高校方面へ向かう道路は、「昨年あたりまで……ほとんど畑」であったものの、両側におよそ百軒の家屋が建ち並んで、地元では「メリケン道路」と呼ばれていた。さらに、十字路から石川方面に向かう道路にも同じく家並が連なり、まるで十字路が「触手を伸ばして一つの隣接町を形つくつて」いるように思われるほどの発展ぶりを示していたのである。そして、家屋の「大部が飲食店まがいの小店、店先にはテーブル、椅子が置かれて、黒人さんがアイスクーキを若い

娘さんと隣合っているのも今では月並の風景」であったという。

また、警察署の談話として「この界限には越来側だけで凡そ三百八十名内外のモグリ女パンパンが居る」ことも紹介されており、そうした女性を囲い込むべく建設された《八重島》が、開業から一年を経ずして機能していなかった様子がうかがわれる。興味が持たれるのは、大工廻朝盛村長（当時）の次のような発言である。すなわち、「この界限は最近非常な賑わいを見せておるが、別の特飲街“八重島町”は一名ニユウ、コザとも呼ばれるので、そこと間違えて外人達がよつて来る向もある……」、と。なお、「十三号線と瑞慶覧天願線との交叉点であるコザ十字路には〔、〕ひと頃は、見すばらしいパンパン小屋が二三あつたに過ぎないが、この頃では、あの十字路を中心に、一寸した宿場町ぐらいには、家並が建て列になつている」（『沖縄タイムス』1951年3月15日）と報じられているとおり、当時、この十字路はすでに「コザ十字路」と呼ばれていたようだ。つまり、嘉間良を指した「コザ」という地名は、同所を離れてニューコザと通称された《八重島》に、そしてこのコザ十字路に転移していたのである。

コザ十字路を考える上で、もうひとつ重要な点がある。それは、「……良く話にきく白ライン、黒ライン」、すなわち「肌の色具合によつてはつきりと遊ぶ場所が区画され、この不文律でお相手を務める彼女等も、一応白相手、黒相手といったレッテルを貼りつけられるようになってきているわけ、全くどこかの租界地みたいな話」として説明される、人種的な空間分化である。

ちよつと区域で示すと、まずセンター区と裏街の八重島が白人街、胡差十字路から胡差高校間が黒人街、同十字路から美里村役場方面並に天願方向が共同街（といつても白人を主としている）、越来村役場一帯が比島人さん相手のハーニーさん達のお住居街といつたところ、従つて白人さんが好きな娘がいるからといつて黒人街に顔を出そうともものなら一ぺんにやつつけられて蛙のようにうちのめされてしまうし、その逆もま

た全く同様、白人街の店が黒人さんを招くようなものなら忽ちボイコットされてしまうことうけ合い、ということになるのだそうだ。(『沖縄タイムス』1953年10月16日)

青山洋二が「コザ今昔物語」で「多分に租界地的な雰囲気」があり、「特殊な空気」に包まれた「国際街」と呼んで暗に示そうとしていたのは、まさにこの消費空間の人種・民族的な分化であったのだ。十字路が小中心地としての性格を強めてゆくのにあわせて、白人と黒人の空間分化が起こったとみて間違いなからう。

(4) 中の町の理想と現実

……村中央に在する村議事堂から生み出された都市計画?の線にそつて胡屋十字路西方約二万坪を敷きならしならずブルトーザは日夜操作され、ゴウゴウたる建設譜が奏でられている。この建設のつち音こそ第二のビジネスセンター建設のカケ声である。(『琉球新報』1953年10月24日)

「コザ今昔物語」に書きとめられたこの一節は、当時、現在進行形の都市開発であったことをうかがわせる描写である。胡屋十字路西方のこの土地区画こそ、後の「中の町」にはほかならない。「この新開地はゴヤ十字路からスターケイジ、五号線道路西方にあつて村の心臓部に当る中央街となるべきもの」(『琉球新報』1953年11月27日)と期待され、人口1万の受け入れが予定されていた(『琉球新報』1954年1月10日)。開発から5年後の風景を垣間見てみよう。

三万坪あまりの土地が開放されると〔、〕先をきそつて住宅がバタバタ

と建てられていった。その一部は軍用地料がそそがれたものであり、復金で建てられたものもある。真新しい壁板が七間道路に区切られてズラッと並んだ典型的な住宅街、これが中の町区のマスクなのだ。（『琉球新報』1959年3月16日）

当初は仮称「美島街」として開発されたものの、一般公募によりコザ市の中心となるべく「中の町」と命名されたのだという。住民はほとんどが軍作業員や民間人であったため、平日も「日曜のようなどけさ」（同前）であったといい、基地都市コザにあっては閑静な住宅街だったようだ。しかしながら、隣接するスターケイジ（米軍刑務所）の跡地が商業地域として開発されることが決まったために、「ビジネスセンターの一環となるのではないか」とも予想されていた。

実際、その後の中の町は沖縄島中部を代表する社交街へと発展するのである。

(5) 大工廻朝盛村長の都市構想

コザの都市計画を振り返るならば、1949年秋に城間盛善村長のもとで構想された「ビジネスセンター」が最初ということになる。城間はビジネスセンターの竣工をみることなく《八重島》の町びらきはかろうじて在任中であった）、助役であった大工廻朝盛に敗れて市政を去った。大工廻は、「就任すると何のためらいもなく都市づくり」に邁進してゆく（『沖縄風土記全集 第三卷 コザ市編』、46頁）。

前述の通り、大工廻が村長に就任した二日後の1950年9月5日、軍道5号線の拡張工事にともなう立ち退きの代償として、諸見里原の土地が開放されている。これをきっかけに、彼は東のコザ十字路と西の島袋三叉路とを結ぶ軍道24号線を都市構造の骨格と捉え、新しい都市計画を構想していた。すなわち、

……古新聞に略図を書いて、嘉間良十字路に二重丸をつけ、コザ十字路のところには三重丸をつけ、胡屋十字路には五重丸をつけ、島袋十字路にはコザ十字路と同じく三重丸をつけて、中心地の等級を定めた。つまり、これからの越来村の都会的中心街は胡屋十字路であり、次に東北端のコザ十字路と西南端の島袋十字路であるとし、嘉間良は二重丸になって、嘉間良時代から胡屋時代に移るであろうことが明示された。(前掲『コザ市史』、489-490頁)

はたして、これを都市計画と呼ぶことができるのかどうか疑問は残るが、次のインタビュー記事は、上述のシンプルな点と線との構想に、いくぶんかは肉づけをしてくれるかもしれない。

(大工廻村長の構想) — 現在越来村の中心地は島袋(山里区)センター、室川十字路、胡差十字路となつているが、これに越来村十字路を加え^{ママ}呉屋十字路を第一中心地とし南の島袋、北のセンター、室川十字路、胡差十字路と続いて行く、現在この構想の邪魔となつているのはセンター区横のモータープール、^{ママ}呉屋十字路の物資集^{ママ}場、旧中央病院前の部隊並びにスターケイジの四つの軍施設であるが、之は将来開放して貰い、モータープールの所は総合グラウンドとして建設する、その北側斜面を緑地帯にし、特飲街は一、二カ所だけに整理、繁華街の目標を軍一点張りとはせずバツクにひかえた美里、具志川、与那城などの農村地帯を考え軍民両面の折衷的な所に置く(『沖縄タイムス』1953年8月5日)

軍施設の開放、「特飲街」の整理、そして脱基地経済への布石と、先ほどの古新聞の地図からは読み取ることのできない構想が浮かびあがるものの、城間前村長の都市計画を引き継ぐ内容とも言えなくはない。本稿におけるこ

こまでの整理をふまえるならば、少なくとも時代と空間の趨勢を政策的に裏付けたということだけは言えそうである。

具体的な事業という面では、1953年2月の土地（東上地原）開放にともなう「中の町」の開発が目を引き、西部のパラダイス通り、そして東部のコザ十字路付近の開発も、大工廻が後押ししていた事実を見逃すべきではなく、事実上、城間－大工廻村政下でコザの都市構造はほぼ完成したものとみてよいだろう。

IV おわりに

1955年8月30日、コザ市は都市計画法の適用都市として認定された。そして、翌1956年の3月23日、市域の70%（15,860km²）を占める軍用地を除く約7,410km²が、都市計画区域に決定する。これを受けて策定された都市建設の方向性は、以下の三つの基本方針として示された。

- 1) コザ市を米琉親善の都市とする。
- 2) コザ市を観光の都市とする。
- 3) コザ市を沖縄中部の政治・経済の中心とする。

これらを達成するための施策として求められたのが、a) 健全娯楽の施設、b) 衛生諸施設の整備、c) コザダム周辺の美化、d) 越来城跡の保存、e) 観光施設の整備、f) 道路及排水施設の整備、g) 街全体の緑化、h) ドル獲得のための営業市場の育成、という8項目である（前掲『コザ1958年コザ市昇格二周年記念誌』）。

一見して明らかなおおりに、多少の施設配置やインフラ整備をふくむとしても、具体的な課題は提示されることがなく、都市計画的イデオロギーの打ち出しはまったく見られない。この点で、評価はともかく、戦後コザの現実と最大限の理想を前面に据えて打ち出された城間盛善のビジネスセンター構想とは、あまりにも対照的である。部分的な用途地域制を含む本格的な都市

計画は、このあと 1960 年代まで待たねばならない。

逆にいうと、1949 年のビジネスセンター構想にはじまる約 10 年間の都市建設は、「軍用地の開放に依り小部分的な区画整理を施行してきた」と総括されるように、段階的かつ空間的にはランダムに開放される土地を活用するしか方途がなかったため、都市空間の全体を見据えて体系性を持たせることなど端から不可能であったのだ。結果、継ぎ接ぎのような都市空間とならざるを得ないものの、開放されるたびに整地して市街地化を促進したことで、可能な範囲で都市建設を完遂したとも言えなくはない。

そして、このような計画的／物理的な側面からは見えにくい次元、それが宮本常一の言うコザの「異質」性であったはずだ。1950 年を前後する時期から簇生した小中心地は、文字どおり「中心」たることを目指しながらも、いずこもサービス業に特化した歓楽的な要素を一身に引き受け、都市空間の文法からすれば〈場末〉的とでも称するべき空間へと変貌していった。それらの消長はあまりに激しく、そして儂い。生産なき空間としての軍事基地は、己の周りに偏倚した消費空間を編成する。基地都市における空間編成の力学を探究することは、引き続いての課題となる。

[付記] 本稿を作成するにあたり、沖縄市役所総務部総務課市史編集担当の皆様にはたいへんお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。ありがとうございました。

注

- 1) この点については、以下の拙稿を参照されたい。『那覇』、「戦後沖縄における基地周辺の『歓楽街』」。
- 2) 1947 年、戦災で消失した戸籍簿の作成がはじまった際、彼は「比嘉政紹」を「青山洋二」に変更して自己申告したのだという（『追憶』、22 頁）。
- 3) 『西田文光伝』に掲載された「桑江朝幸市長の証言」（93-94 頁）。なお、西田文光伝刊行委員会の委員長を務めたのは、青山洋二である。
- 4) 『西田文光伝』に掲載された「桑江朝幸市長の証言」では、次のようになっている。「ここに展示された品物の欲しい方は、その品物の価格と同等の他の品物を持ってくると。展示物の所有者がその品物と交換してもよいという条件が合えば、相互に交換す

る。但し、その際交換手数料を支払うこと、又品物を預託して一割の手数料で売ってあげます」(95頁)。

- 5) ただし、『西田文光伝』に掲載された「桑江朝幸市長の証言」の項目にある「コザデパートの頃の嘉間良」とキャプションのついた地図には、「1953年頃」という書き込みがあり、中央劇場の入り口部分に、「桑江 青山」(コザデパート)とある(93頁)。
- 6) 「……越來村役場一帯が比島人さん相手のハーニーさん達のお住居街といつたところ」(『沖繩タイムス』1953年10月16日)、あるいは「胡屋区本部落のこのごろ」として、次のような紹介記事がある。

こゝはもと中央病院のあつたところ、適当に残つた木々が緑の蔭を落して暑さを防いでいる。喧そうな大通りからの雑音も、引込んだここまでは届かない、全く気持ちの良い住宅地帯、愛の巣をつくるにはもつて来いの場所だ。金銭に糸目をつけない豪華人のハーニーさん達が続々押しかけ、これに調和した地主さん達がつぎつぎと家を建てるというのも当然のこと、病院が引越したのは昨年十月というのに早くも七、八十軒の新しい家が出来ており、然もどの家をもてハーニーさんの居ないところはなく、人口の三分の二はこういつた無籍者で占められているとのことだ。(『沖繩タイムス』1953年10月17日)

「コザ今昔物語」とほぼ同時期の記事であることからすると、青山の言う「ハーニー部落」はここを指していたものと思われる。

- 7) 「コザ十字路を中心として急激に発展した商業地帯を緩和する為め照屋後原の水田地帯一万五千坪を地主組合の協力に依り建設がなされた」(コザ市総務課編『コザ 1958年コザ市昇格二周年記念誌』、30頁)わけだが、この事業を推進したのが当時の村長であった大工廻朝盛である。
- 8) 『琉球新報』(1956年9月15日)に掲載された「コザを見たまゝ、聞いたまゝ、⑤ 沖繩人租界」には、以下のような記述がある。

コザの目抜通りの近くに俗称「尺八部落」と呼ばれる地帯がある。戦後、尺八の名人がこの地を訪れ、アメリカの兵隊達にその調べを紹介したことから、こう呼ばれるようになったとか。ここには約二百軒の民家があり、向う三軒両隣りには警察署、中央病院、保健所、それに風俗営業組合連合会事務所とその診療所がある。コザ市のオフ・リミッツは解禁されたとお偉方は喜んでいますが、この一帯は五四年七月にオフ・リミッツを食されたまま未だに解禁されていない。ニカ年余りも外人の立入りを許されない地域で、いわば基地の街「コザ市」の沖繩人租界地というところ。この界限に住む街娼は約三百と言われる。

先ほどの記述は、この「沖縄人租界」を指しているものと考えられる。

引用・参考文献

青山洋二『追憶 付・硝煙のかなたへ』青山洋二、1997年。

沖縄風土記刊行会編『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』沖縄風土記刊行会、1968年。

加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』フォレスト、2011年。

加藤政洋「ビジネスセンター構想と《八重島》」(『KOZA BUNKA BOX』第8号、2012年)、40～53頁。

加藤政洋「戦後沖縄における基地周辺の『歓楽街』——《泉町》と《辻新町》の成立をめぐって——」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第101号、2013年)、1～26頁。

(越来村)総務課編『越来村村勢要覧』越来村役所、1954年。

コザ市『コザ市のすがた』コザ市役所、1961年。

コザ市編『コザ市史』コザ市、1974年。

コザ市総務課編『コザ 1958年コザ市昇格二周年記念誌』コザ市役所総務課、1958年。

城間盛善「コザ BC 通りの変遷 沖縄市に『買物公園』」(『政経情報』第76号、1985年) 64～67頁。

中部興信所編『中部商工名鑑 1962年』中部興信所、1963年。

西田文光伝刊行委員会『西田文光伝～激動の時代に生きて～』西田文光伝刊行委員会、1988年。

宮本常一『私の日本地図 8 沖縄』同友館、1970年。

著者不明『コザ 照屋 1965』(沖縄市役所総務部総務課市史編集担当所蔵)。